



メニュー番号	601
メニュー名	国際理解教育（世界の生活、文化、教育など）
校名(学年)	滋賀県立聾話学校
講師等	滋賀県総合企画部 国際課
学習名	人権教育(国際理解教育)
教科等	特別活動 自立活動
実施日	令和2年 12月 7日(月)

《 授業 》

この度の連携授業は、人権週間(12月4日～12月10日)に因み、滋賀県立聾話学校と県総合企画部国際課が連携した人権学習会として実施されました。講師は、国際課員の佐藤さんと国際交流員エミリー・ラモン・カルディナルさん(カナダ)、カプリエル・ギマランイスさん(ブラジル)の3名。国際交流員の2名が出身国の地理や生活様式等について語り、必要に応じて佐藤さんが説明に加わり理解を深める形で授業が進められました。また、聾話学校の教員たちが交代で手話通訳を行ない、子どもたちへの支援に努められました。

授業は、はじめに生徒会副会長が代表であいさつを行い、その後まずエミリーさんがカナダを紹介し、休憩をはさんで後半にカプリエルさんがブラジルを紹介する流れで展開されました。お二人の話の内容は、概ね共通しており、比較しながら聴くことができました。

主な内容は、(1)地図上でのカナダ・ブラジルの位置と国土の面積、人口、時差、(2)人種、宗教、言語、(3)学校制度・生活、(4)食べ物、(5)年中行事、(6)自然などについてでした。

お二人とも日本語がとても流暢で、写真や実物の遊具、国旗などを使いながらとても分かりやすく、途中で生徒たちを笑わせながら、楽しく自国の紹介をされ、みんな興味深く聴くことができました。

なかでも、当日の授業は人権学習の一環として実施されたこともあり、生徒たちに対して次の3つの点を特に強調して話されていました。

- ① カナダもブラジルも移民の方が多く住む国であり、言語・宗教・食生活・生活習慣・肌の色など、多くの異なりを互いが理解しあって暮らしていること。
- ② 日本人にとって普段当たり前だと思っている考え方や行動が、実は外国人の方にとってはとても感心させられるものであったり、逆に理解に苦しむものであったりすること。
- ③ たとえ言葉や手話が通じなくとも、ジェスチャーや遊びを通して互いに交わることで仲間になれる。だからこそ、自分から相手を遠ざけ距離をおくことをしないでほしいこと。

授業の途中、カプリエルさんが、いろんな肌の色をした10名程の顔写真を映し出し、「どの人がブラジル人ですか。」と生徒たちに問いかけられた場面がありました。多くの生徒は、カプリエルさんと同じ白人系の人物の写真を選ぼうとしていましたが、実は全員がブラジル人。ブラジルには、黒人系や黄色人種系の人々も多く居住しており、その中には日系ブラジル人の方もおられる。そして、100年以上前、移民としてブラジルに渡った日本人の子孫が、今度はブラジルから日本に来て滋賀県でも多くの人が働いていることを話されました。そして、その方たちの子どもの中には、日本語が上手く話せず、日本の学校へ行きづらい思いをしている子がいることを紹介し、もしその子どもたちと出会うことがあったら、ぜひ仲良くしてほしいというメッセージで授業が終わりました。

《 感想 》

児童・生徒

◇世界中の人たちと繋がるには、言葉は必要ではなく、温かい心であるとわかりました。

◇日本の常識は、世界の常識とは違うことに気が付きました。

学 校

◇様々な要望に対し、丁寧に対応いただきました。当日は、スライド写真をたくさん使い、聴覚障害を有する子どもたちが見てわかる講義をしていただきました。講義を通して、日本とは違う様々な生活や文化等を知ることができました。さらに、互いを正しく理解し共に助け合い、支えあって生きていくことの大切さを学ぶことができました。

支援者・講師

◇興味を持って熱心に参加してくださり、ありがとうございます。ほかの国のことを知ると、とても面白いことがいっぱいあるので、また、ぜひ調べてください。なお、メールでのやり取りで事前打ち合わせをしましたが、特に大きな問題はありませんでした。また、今回は聾話学校での連携授業ということもあり、わかりやすく伝える工夫など、学ぶことが多くありました。